

実践報告

Skype を活用した 日中会話交流プログラム

中俣尚己・漆田彩・小野真依子・北見友香・竹原英里

1. はじめに

この実践報告では、2012 年度に実践女子大学国文学科、実践女子大学大学院国文学専攻の学生が、中国の湖南大学の学生と行った Skype を活用した日本語会話交流プログラムについて報告する。この実践報告の構成は以下の通りである。まず、2. で Skype を用いた交流を湖南大学と行うようになった経緯を述べる。続いて、3. で 2011 年度の活動の詳細について述べる。4. では活動の評価を行う。5. から 8. は実際に参加した大学院生による報告からなる。9. では今後の課題を示す。なお、5. から 8. はそれぞれの筆者を節タイトルとともに示す。1. から 4. と 9. は中俣が執筆した。

2. 本実践を行うことになった経緯

Skype を用いて、日本の大学の学生が、海外で日本語を学習する学生に日本語を教えるという活動は中俣・岩崎・荻原・中野・山上（2012）などでも示した通り、2つの機会不足を解消することが目的である。すなわち、日本側の「日本語教育実習経験の不足」と、海外側の「生の日本語と接する機会の不足」である。

特に、日本側の問題について述べると、実践女子大学では、日本語教育の実習のために特別のプログラムを組んでいるわけではない。また、模擬授業や短期の実習ではどうしても焦点が曾余田・岡東（2002）のいう「1. 目に見える実践的技量（テクニカル・スキル）」に当てられ、「2. 人間の内面的な思考様式にかかわる技量（コンセプチュアル・スキル）」「3. 教員と子ども、教員同士の関係などに必要な技量（ヒューマン・スキル）」にはなかなか当たらない。これらはある程度の期間に渡って、学習者との人間関係を構築する中で育まれるスキルであるからである。

そこで、2011 年度には筆者の前任校である京都外国語大学とともに、ハワイ大学のカピオラニ・コミュニティ・カレッジの学生と、Skype を通じて日本語で会話を行うという実践を行った。実践女子大学では初の試みであったため、参加者は院生 4 名であったが、特に学習者との関係において意識の変容が見られ、「教えこむ立場からの脱却」と呼ぶべき変化が確認された。(大谷・中俣 2012、中俣・岩崎・萩原・中野・山上 2012) しかしながら、3 つの大学による実践は指示系統の混乱も生んだ。また、京都外国語大学の SNS を用いての報告は、実践女子大学の学生にとっては不便な側面もあった。そこで、2012 年度は京都外国語大学とは独立で、実践を行うことにした。また、過去の実践から、日本語教育主専攻ではない学部生であっても十分な成果を残せるものと判断した。

交流の相手として選んだのは、筆者の習得研究の調査協力校でもある、中国の長沙市にある湖南大学である。日本語学科では 90 名もの学生が日本語を学ぶが、ネイティブの教師はほとんどいない。また、内陸に位置するという地理的条件から、上海などの都市と比べて、日本人の数が非常に少ない。まさに、「日本語を使った自然なコミュニケーション」の欠乏に喘いでいると感じられた。

2012 年 3 月に湖南大学日本語学科長の張佩霞氏が来日した折にこのプロジェクトについて打診したところ、すぐに興味を示して頂けた。また、プロジェクトの実践には、湖南大学では楊昉氏に多大な協力をいただき、2012 年のゴールデンウィーク明けより実践を行った。

3. 本実践の詳細

ここでは、具体的にどのように実践を行ったかについて述べる。

3. 1 対象者

湖南大学の学生は 2 年生を対象とした。これは、ちょうどこの時期が、ひと通り初級の文法を覚えたが、使う機会がないということでモチベーションが下がりやすいためであり、湖南大学の先生方の希望があったためである。ひとつのクラス、15 名が参加した。日本では大学院生 4 名に加え、日本語教育のゼミをとっている 3 年生からも希望を募り、最終的な参加者は合計で 13 名となった。院生 2 人は、隔週で別々の人と会話をし、1 人で 2 人の学習者を担当することとした。

3. 2 期間

日本側ではまず4月13日に参加者を募集した。この時点で、ほぼ全ての学生がSkypeを知っており、Skypeの使い方に関する説明が不要であったことは驚きであった。

その後、4月25日に一度目の顔合わせを行ったが、中国側がほぼ全員出席し自己紹介を行ったのに対し、日本側の参加者はわずか1名であった。しかし、2011年度の活動においても、実践女子大学・京都外国語大学ともにこのようなミーティングへの出席率は非常に悪く、にも関わらず、ネットを用いた交流には何の問題もないペアが多かったことから、特に気にはかけなかった。

また、筆者もこの時初めて湖南大学の2年生の日本語のレベルを知ったが、想像よりも遥かに高く、印象では上級に近い学生もいた。2011年度の対象者は完全に初級レベルであり、教科書から離れた内容で会話をすることが困難なペアもあった。しかし、湖南大学の学生は、様々なテーマについて日本人と話すことが十分に可能と判断され、活動の内容を、「日本と中国の文化の違いについて話し合う」ことに定めた。具体的には、回ごとにテーマを決め、それについて日本と中国の違いに気をつけながら話すことにした。中国人学生は基礎的な力は十分に身につけているので、不完全文も含む自然な会話を体験させ、会話を楽しむことを第一の目的とした。また、日本人学生も、教師のようにきちんと文法説明ができるわけではないので、そこに重点はおかず、中国人学生との会話を通じて、日本の文化と言語を再発見する、ということを目的とした。そのため、各回のテーマは日中双方の学生から意見を集め、筆者がまとめて選定した。

連休明けから各自連絡をとりあってもらい、交流を開始した。すぐには連絡がとれないペアもあったが、予め双方の教員が学生のアドレス、Skypeネームを全て把握していたことで、遅くとも1週間以内には連絡がとれた。これは2011年度と比較して改善された点である。第1回は顔合わせの自己紹介とし、第2回以降は決められたテーマについて自由に話すという形式とした。1回の時間は最大で1時間とし、短くしても構わないと指示したが、実際には、ほぼ全てのペアが毎回1時間たっぷり会話をを行った。

期間は5月から6月の2ヶ月であったが、6月に中国側の学生が、「もっと続けたい」との要望を出したため、これを受け、7月第2週まで活動を続け「てもよい」という指示を出し、追加のテーマも設定した。ただし、実際には双方の学生の都合で休む週もあったため、交流回数には5回から10回とばらつきがある。

3. 3 機器の準備

交流はスマートフォン、PC のいずれでも可とし、希望者には web カメラの貸し出しを行った。また、国文学科共同研究室の学生使用可能な PC3 台にも web カメラを設置し、Skype による会話の環境を整えた。国文学科共同研究室は 16:30 に閉室するが、助手にお願いし、18:30 まで、また中候不在時であっても交流ができるようにしてもらった。

また、今回は新しい試みとして、後にコーパス化することを狙い、会話の内容を録音することにした。当初は録画も考えていたが、ファイルサイズが膨大となるため、録音のみに切り替えた。録音に応じてもらえる学生には許諾書を書いてもらったうえで、録音ができるソフトウェアを紹介した。ただし、スマートフォンでは録音が行えないため、許諾書を書いた学生全ての会話を録音したわけではない。また、Skype との接続ミスでうまく録音できない回もあったが、最終的には計 42 時間分の会話を録音することができた。

3. 4 フィードバック

2011 年度との大きな違いとして、Facebook 上にコミュニティを作成し、各回の活動報告やこちらからの指示は全て Facebook で行った。よほどのことがない限り、メールなどは使用しなかったが、こちらからの指示が行き渡らないという問題は特になかった。なお、中国からは Facebook を閲覧できないこと、また、毎回の感想について報告する場でもあることから、Facebook に参加するのは日本側の学生とスタッフのみとし、中国側の学生とスタッフは別の中国のネットサービスを利用してフィードバックを行った。なお、途中から日本語教育ゼミの担当者である山内教授にもコミュニティに参加していただいた。

また、終了後にアンケートを行った。

3. 5 テーマ

各回のテーマは下記の通りである。

表 1 各回のテーマ

1	自己紹介	6	今住んでいるところと故郷の話
2	大学生活	7	敬語
3	日本のポップ・カルチャー	8	祭・伝統行事
4	料理	9	夏休み、長期休暇 (一般的な話も含む)
5	家庭、子供が大人になっていくまで	10	自由 (1 組のみ)

第2回から第6回は特に中国側の学生の希望を元に選定した。第7回は、Facebookなどで敬語に関する質問があったことを受けて行った。敬語に関しては張賛（2012）が、敬語について学習者で意義などについて話し合うことの効果を報告している。日本人と中国人が共に敬語について考えることで、日本側の学生には日本語の敬語について深く考えてもらうこと、また、中国側の学生には、敬語は必要だが、日本人も苦勞している項目であり、苦手だからといって即座に自信を喪失する必要はないということを感じてもらうことが狙いであった。第8回と第9回は交流期間の延長を受けて追加したテーマである。

また、6月の後半からは、1度の交流の間で1つだけ、中国側の学生が日本側の学生に文法に関する質問するコーナーを設けることにした。これは自然な会話を通じて、文化に関する理解を深める、という当初の目的とは逸脱するが、すでに文法的な質問を受けている学生も多く、それならば、きちんと区切りをつけて質問をしたほうがよいと考えたためである。また、日本側の学生は院生、3年生ともに授業で類義語の違いを説明する活動を行っており、実際の学習者が本当に知りたいと思っている疑問をぶつけることは、授業に対するモチベーションを大いに高めるであろうと期待した。ただし、学習者が納得するような説明までは望まず、2人で一緒に色々な例文を作って、その例文が言えるか言えないかを考えてみる、という活動であると説明した。

当初は中国側の学生に意図が伝わらず、60分ずっと文法の話をしたペアもあったが、報告を受けてすぐに楊先生に申し入れ、次の回からは誤解は解消された。

この提案を楊先生にした後、楊先生が「質問の候補」として送ってきたリストが以下の図1である。実際にこの全ての質問があったわけではないが、これが中国の学習者が実際に説明を聞きたいと思っている項目である、という意味で、重要なリストであると考えられる。

1 組

広まる / 広がる ; 知る / 分かる ; にくい / かねる / がたい ; 苦しい / つらい ;
訪ねる / 訪れる ; きっかり / かつきり ; それにしては / それにしても ;
もっとも / ただし / しかし ; 評価 / 評判 ; 忽せ / いい加減 / 疎か ;
ごろ / くらい / ほど / まで ; さえ / すら ; する / やる ; やむ / よす ;
抱える / 抱く (いだく) ; かなり / ずいぶん / だいふ / なかなか ;
かなしい / さびしい

2組

らしい／ようだ／そうだ／みたい；ば／たら／と／なら；ものを／くせに；
 ただ／ただし；である／ておく／ている；（場所）＋で／場所＋に；
 なんか／なんて；など／とか；なんとなく／なんだか

3組

ただし／もっとも；もの／こと；がたい／にくい

図1 湖南大学の学生が質問候補としてあげた類義表現のリスト

1組と2組は各人がバラバラの項目を聞き、後で情報を交換するというストラテジーをとり、3組はあえて全員が同じ項目を聞き、後で聞いた説明を比較するというストラテジーをとった。

4. 本実践の評価

ここでは、日本人学生側の評価について述べる。評価は、Facebookの書き込み、並びに活動終了後にネットを通じて行ったアンケート結果から行う。

4. 1 Facebook

昨年度と比較し、本年度最も顕著な変化が見られたのは、Facebookを導入したことにより、事後報告が大幅に増大し、内容も詳しくなったことである。2011年度は京都外国語大学のSNSを使っていたが、これは書き込むページに移動するまでに何度もクリックしなければならず、そのためか、報告の数は4人で12件にとどまり、1度しか報告を行わなかった学生もいた。一方、今回は参加者が13名いたとはいえ、書き込み数（レスポンスを除く）は120回を越え、ほぼ毎回何らかの報告を行っていた。これにより、教員は学生の様子を細かく知ることができた。また、気軽に書き込めるためか、書き込み内容も具体的で、活動中のちょっとしたエピソードを書く学生が多かった。今回は、テーマを文化の差に設定したため、文化の違いを驚きをもって書く報告も多かったが、日本語の内容についての報告もあった。以下に2つほど、学生の書き込みとそれに対する筆者のレスポンスを挙げる。やや長くなるが、Facebookの雰囲気伝えるために、まるまる引用する。

(1) 中国の大学生はみんな寮に住んでいること。部活、アルバイト、生活など話しました。中国の大学生は勉強に専念するみたいで、部活も試験に

向けて勉強する勉強会などが多くあるそうです。アルバイトもほとんどしないそうです。勉強で忙しいみたいで、見習わなければと思いました。

日本の野菜はなんで高いのか？牛肉と比べて鶏肉はどうして安いのか？を質問されてうまく答えられませんでした。

今度、授業で敬語の試験があるそうで、敬語は難しいと言っていました。

来週も同じ時間で交流します。

(2) (1) へのレス

お疲れ様！うーん、なかなか鋭い疑問ですね！国文学や日本語学専門だとそういう質問にはなかなか答えられませんよね。日本語教師は、学習者にとって「日本の窓口」なので、本当に色々な質問をされるのです。（私も色々された……）その全てに答えられる必要は全くありません。しかし、余裕があれば色々なことに興味を持って「教養」をみにつけておくことも良いと思います。敬語は中国にいと、特に難しいです。（耳にしないから）テーマは決めたとおりですが、余裕があれば、敬語の練習につきあってあげてもいいですよ！これは他の人も同じです。

(3) 6 回目の交流では故郷と今住んでいるところについて話しました。

××さんは、高校生になるまでは両親が仕事で忙しかったので祖母と郊外に住んでいたそうです。家の庭で、祖母と一緒に野菜を作ったり、犬と遊んだりして育ったと言っていました。中国の田舎の方は、たいてい農業をしている家庭が多いようで、都心と比べて人や情報量が少ないという点は日本と変わらないなと思いました。今、住んでいる湖南省は発展していない都市だと言っていて、近くにスーパーなどはあるらしいんですが、買い物はネットショッピング（taobao や馬雲（マーリン？））でしているみたいです。

また、「祖母」という言葉について質問されました。中国では「外婆（ワイポー？）」と「？（ナイナイ？）」に分かれていて、「外婆」が母方の祖母を指すらしいんですが、日本語では何というのか聞かれました。私は「母方の祖母」と「父方の祖母」といって区別しているんですが、はっきりとは答えられませんでした。それに関連して「伯父」と「叔父」や「伯母」と「叔母」についても少し触れて話しました。

(4) (3) へのレス

いや、湖南はビルだらけですよ！もちろん上海と比べれば見劣りはしますが、日野よりも遥かに近いです（笑）相手の中での都会のハードルが高いなー。家族を表す言葉が細かく分ける言語もあれば、そうでない言語もあります。日本語では

＞「母方の祖母」と「父方の祖母」ということで OK ですし、適切な回答だったと思います。

英語では兄と弟を区別しませんよね。中国語では祖父も祖母主（ママ）分けるのです。ちなみにナイナイはこんな漢字→（簡体字）

筆者は 2011 年度も 2012 年度も全ての報告に対して返信を行ったが、その時の心理的負担度からいっても、12 件の 2011 年度よりも 120 件の 2012 年の方が楽であったといえる。全員の報告をタイムラインで眺めることができ、画面切り替えなしに返信を行える Facebook のシステムは活動報告の場としては非常に適していると考えられる。学生への連絡も Facebook に書く方が、メール送信よりも手早かった。また、日本語教育担当の山内教授も、この活動で初めて Facebook に参加したが、「思っていたよりも報告を読むのは負担にならず、楽しかった」とのコメントを頂いた。

また、当初の想像以上の効果も見られた。交流相手から、日本の若者言葉について聞かれた学生がそのリストを Facebook にアップロードし、周りに意見を尋ねたり、日本語の文法について質問された学生が、オリジナルのプリントを作って説明した後、それを Facebook にアップロードしたりしたことである。これらは全く教員の指示ではなく、学生の自発的な行動である。気軽に書き込める Facebook が学生の自律学習を促したと言える。

4. 2 活動終了後のアンケート

活動終了後にアンケートを行った（有効回答数 11）。以下、各設問の回答を順に見ていくことにする。記述式に関しては、主立った回答のみを載せる。また、回答数は自由なので、1 人で複数の回答をした学生もいる。

Q2 このプログラムを通して期待していたことは何ですか？（例 日本語指導力を高めたい、海外の学生と友達になりたい）

日本語教育の経験を積みたい……3 日本語指導力を高めたい……3

海外の人と話してみたい……3 海外の文化に触れたい、知りたい……3

Q3 Q2 の目標は達成されましたか？

〈そう思う〉8 〈とてもそう思う〉3

Q5 全部で何回交流しましたか？

平均 7.8 回

Q6 学習者に変化があったと思いますか？それはどんな点ですか？

だんだん積極的に話すようになってきてくれた、相手から質問してくれるようになった……4 話す速度についてこられるようになった……2

Q7 あなたに変化はあったと思いますか？それはどんな点ですか？

大別すると、自身の日本語に関する変化と学習者との関係に関する変化が見られた。後者は中俣・岩崎・萩原・中野・山上（2012b）でも報告したが、長期的な活動ならではの変化であるといえよう。(5) (6) は日本語に関する回答、(7) (8) は学習者との関係に関する変化の回答である。

(5) どのように言ったら相手に伝わるのか、自分自身の日本語を見直すきっかけになったと思う。

(6) 変化かどうかはわかりませんが、日本語をはっきり話すように心がけました。

(7) 日本語でうまく話そうという思いよりも、教師と生徒？の信頼関係を築こうという思いのほうが強くなっていた。信頼し合える関係になってはじめて「教える」ということができるのだと思った。

(8) はじめは十分な準備をしなければいけないという気持ちでしたが、交流を繰り返すうちにその場で感じたことを伝える方がいいと思えるようになった。

その他、日本語教師へのモチベーションに関する回答もあった。5. ～8. の大学院生の報告にもその内容は記載されている。

Q8 外国人と交流したり、日本語を教えたりする時に大事だと思う点は何ですか？

相手の話をよく聞くこと……3 相手の文化を知ること、尊重すること……2 会話を楽しむこと……2 自分の当たり前を当たり前と思わないこと……2

「相手の話をよく聞くこと」に関しては、「会話が途切れても、相手は続けて話したくて次の言葉を頭で考えていることがよくあった。」という報告もあった。また、「当たり前を当たり前と思わないこと」に関しての詳

細は 5. 5 の漆田彩の報告に記載されている。

Q9 日本語教師という職業に対するイメージについて、何か変化があったら教えてください。

変化なし……3 日本語を教えるのは難しい……3 教えられることも多い……2

日本語教師志向の強い学生にとっては特にイメージの変化がないという傾向は過去の実践と同じである。

Q10 この活動を楽しいと感じましたか？

〈とてもそう思う〉6 〈そう思う〉4 〈あまりそう思わない〉1

Q11 どんな時にそう思いましたか？

説明がうまく伝わった時……6 教えたことが「役に立った」と後で言われた時……2 文化のギャップに気づいた時……2

Q10 で〈あまりそう思わない〉と答えた学生は、相手が無断で時間に現れなかったり、メールの返事をしなかったりしたことがあったためであり、結局活動は5回で終了してしまった。ドロップアウトする学生や時間を守らない学生は双方で現れる可能性があり、今後、同様の交流活動を行う上で必ずつきまとう課題である。無断キャンセルは相手に多大な迷惑をかける行為であることを周知するとともに、キャンセル時の連絡方法を周到に準備する必要がある。

Q12 テーマを決めたことで、交流をやりやすくなったと思いますか？

〈とてもそう思う〉7 〈そう思う〉3 〈あまりそう思わない〉1

Q13 印象に残っているテーマを1つ教えてください。

中国と日本の大学 2 敬語 2 日本の文化 3 行事 1 故郷 1 食文化 2

もう少し偏るかと思ったが、ばらけた結果となった。様々なテーマを用意することで、学習者の多様な興味に合わせられたのではないだろうか。

Q14 また、このような機会があれば参加したいですか？

〈とてもそう思う〉3 〈そう思う〉7 〈あまりそう思わない〉1

Q15 facebook に書き込みをすることは自分の日本語指導をふりかえるのに役立ちましたか？

〈とてもそう思う〉5 〈そう思う〉5

Q16 なぜそう思いますか？

振り返りができる……7 他の学生の様子が見られる……4

Facebook を使ったフィードバックに関しては肯定的な評価が多かった。Facebook は「他者との繋がり」が強調されるソーシャルネットワーキングサービスであるが、そのメリットとして、「振り返り」「反省」という回答が多かったことは注目に値する。筆者が京都外国語大学で日本語教育実習生に SNS を使ってダイアリーを書かせた活動（中俣・中西・由井 2011）のフォローアップインタビューにも、「最初は自分で書いて読み返すために書いていた」という証言があり、ダイアリー活動の本質はあくまでも内省にあると言えよう。今回、特に学部生には内省しながら書きなさい、という明示的な指示は出さず、教員が状況を把握するために、という程度の指示しかしていなかったが、実際は内省が行われていたことがわかる。学習者を担当する、という責任感からであろうか。

他者の書き込みは参考程度であることが次の設問からもわかる。

Q17 他の人の facebook の書き込みを参考にしましたか？

〈時々参考にした〉8 〈毎回参考にした〉3

Q18 何を参考にしましたか？他の参加者の書き込みをみてどう思いましたか？

基本的には、同じ話題で他のペアがどのような会話をしたかを見る、という回答であった。また、以下のような使い方も見られた。

(9) 会話に行き詰ったときに、中国では～だと聞きましたが・・・というように話題提供をした。日本語についての質問を改めて自分でも考えてみた。

(10) 初めどのように進めていいのかわからなかったのが、皆の進行がよくわかり不安はなくなりました。しっかり学習者の疑問を分析している方もいて、凄いいと思いました。私にとっても日本語について勉強になりました。

(11)私は他の人たちよりも交流が早めに進んでいたもので、反省用に使っていた。「ああ、こう教えればよかったんだな」「ああ、こういう話をすればもっと盛り上がったよな」等々

Q19 交流(体験)を通して疑問に感じたこと、直面した課題・問題は何ですか？
3つ以上あげてください。

Q20 上記の疑問や問題は解決できましたか？解決した場合、どのように解決しましたか？解決できなかった場合、何が未解決のままになりましたか？
最も多かった課題は「類義語の説明」であり、これは未解決という回答が多かった。その次には「誤用訂正のタイミング」が多かったが、これは全員が回数を重ねる内に自己解決していた。具体的なエピソードは、7. 5の北見友香の報告に掲載されている。

Q21 どういう支援があればよかったですか？
類義語の説明……2 全員でのフィードバックの機会……1 性能のよいパソコン……1 ビデオの説明……1

Q22 このように日本語をスカイプやSNSを使って指導するというプログラムのメリットはなんですか？
海外のネイティブと話せる……5 時間の融通が利く……4

Q23 このように日本語をスカイプやSNSを使って指導するというプログラムの問題点(デメリット)はなんですか？
切断する、画質・音質が悪い……8
画面上だけでは文化を説明しにくい……2
時間と空間の制約が取り払われるメリットがある反面、多くの学生が通信エラーに悩まされた。これは技術的な問題であり、今後の性能向上に期待したい。

4. 3 評価のまとめ

本節では、Facebookの書き込みと、アンケートから、本実践の評価を行った。Facebookを用いた効果は大きく、学生もそれを内省に活用していたことがわかった。また、活動そのものに対する評価も高く、多くの学生に「日本語教師

をしていて楽しい瞬間」を体験してもらえたことが最大の成果であると言える。

以下 5. から 8. では実際に活動に参加した大学院生の具体的な報告を掲載する。

5. 漆田彩の報告

5. 1 はじめに

ここでは、筆者（漆田彩）が2012年5月から7月にかけて計9回、湖南大学の学生と行った Skype 交流の具体的な活動内容を報告する。

5. 2 実践の概要

筆者は5月10日から7月7日にかけて、林梦雅さん、卢菲菲さんと交流を行った。1回目は2人と同時に交流し、お互いに自己紹介をした。2回目以降は相手方の希望により、1週間交代で1人ずつと交流を行った。

活動内容は、毎回事前に決められているテーマに沿って、最大60分間会話をするというものであった。互いに自国の文化を紹介し合ったり、趣味について話したりした。話しているうちに話題がテーマから逸れてしまうことも多々あったが、無理に話を元に戻そうとするのではなく、自然な流れで会話を楽しむことを優先した。

5. 3 印象に残ったこと

交流相手の2人はとても積極的で、毎回たくさんの質問をこちらに投げかけてきた。こちらが話す内容を熱心に書き取りながら聞いており、日本や日本語に対してとても興味を持っていることが伝わってきた。そのことは、日本人として大変喜ばしいことであった。

そして、こちらも中国の文化について多くのことを教えてもらった。中国について様々なことを紹介する2人の姿はとても生き生きとして、自国のことをたくさん知ってもらいたいという気持ちが表れていたと思う。会話の中に出てきた中国の歴史的建造物や料理などの写真を、毎回のよう交流終了後、メールで送って見せてくれた。自国の文化に大きな誇りを持っているのだと感じた。

5. 4 気づいた変化

湖南大学で日本語を学んでいる学生は、これまであまり日本人と会話をする機会が無かったとのことで、今回の活動は2人にとってとても新鮮な体験で

あったと思う。それゆえ始めは緊張もあったと思うが、回を重ねるごとにどんどんこちらとの会話を楽しんでもくれるようになっていくのを感じた。「漆田さんと会話をするのは毎回楽しい」と言ってもらえた時は本当に嬉しかった。

もちろん相手はまだ学習途中であるため、不自然な日本語や誤った表現を使用することも多かった。相手が伝えたいことをこちらがうまく理解できないことが何度もあり、そのたびにお互いもどかしい思いをした。でもそういった経験が、2人が自身の日本語を見直すいい機会になっていたように思う。通じた言葉、通じなかった言葉がはっきりしたことで、今後の日本語学習に対する課題がはっきりしたのではないだろうか。

また、筆者自身の気持ちにも変化があった。筆者は日本語教師という職業に関心があり、これまでもボランティアなどで外国人と交流したり、日本語を教えたりする機会があったのだが、今回の活動が今までで一番相手に喜んでもらえたように感じる。それにより、日本語教師という仕事に対するやりがいを変えて知ることができた。将来日本語教師として働けるようになったら、常にやりがいを感じながら仕事ができるように、今からできる努力をしていきたいと、これまで以上に強く思うようになった。

5. 5 活動を通じて学んだこと

交流中、日本語や日本の文化について多くの質問を受け、解説していく中で、筆者自身の力量不足な点や知識が欠落している部分がはっきりと分かった。特に、自分の興味や関心から離れた質問を受けた際、日本のことにも関わらず、うまく答えられないことが何度もあった。これからはもっと幅広くたくさんのことに関心を持ち、何を聞かれてもそこから話を広げていくことができるようになりたいと感じた。日本の文化を見直す良いきっかけとなった。

また、自分は普段当たり前に使っているが、学習者にとっては理解が難しい言葉や言い回しが、日本語にはたくさん存在する。それらを相手に分かりやすく説明することは大変難しい。そのため交流中、こちらの言いたいことがうまく伝わらない、という場面に何度も直面した。「この言葉を学習者に理解させるには、どのように説明したら良いのだろうか」ということを、交流時だけでなく常日頃から考えることが大切だと思った。

5. 6 おわりに

Skype を利用しての異文化交流は、筆者にとっても、恐らく交流相手の2人にとっても初めての経験であった。それ故に、お互い自分の言いたいことを

うまく伝えることができなかつたり、相手の言うことを聞き取ることができなかつたりと、様々な問題に直面した。それでも会話をあきらめることなく、その都度解決の糸口を探りながら交流を続けたことで得られたものは、筆者にとってかけがえのない財産となった。全体を通して、とても楽しく交流をすることができたと思う。

しかし、Skype を通して会話をするということには悪い面もあった。パソコンの接続に問題があるためか相手の声がとぎれとぎれになってしまい、ほとんど聞き取れないという状態に陥ることが何度もあった。異国にいる相手と簡単に交流ができる Skype であるが、こういったトラブルが付きまってしまうのも事実である。

今回の交流を通して、日本語教育の勉強を続けていく上での課題がはっきりした。筆者自身の今後に生かせるよう努力していきたい。

6. 小野真依子の報告

6. 1 はじめに

ここでは、筆者（小野真依子）が2ヶ月間に渡り、中国の湖南大学の学生2名と Skype を用いて交流を行った活動の内容を報告する。

6. 2 実践の概要

筆者は平成24年5月15日から7月10日にかけて、湖南大学の学生である商芳清さん、何宇亭さんの2名と Skype を用いて交流を行った。

交流は初回のみ筆者と商さん、何さんの3名で同時に行い、2回目からは1週間ごとに1名ずつ、1対1の交流を行った。交流の回数は全員で1回、商さんとの交流が4回、何さんとの交流が4回の計9回である。1回につき交流時間は約1時間であった。

交流は Skype のビデオ通話を用いて行ったが、インターネットの不具合等により、音声のみで交流することもあった。初回は自己紹介を中心に行い、2回目からは事前に決めたテーマにそって会話をした。

6. 3 印象に残ったこと

商さんも何さんも初めの頃の交流では、あまり積極的ではなかったが、徐々にそのような雰囲気もなくなった。2人とも非常に真面目で、テーマに沿って何を話すのか事前にしっかりと調べ、まとめてきているようだった。中国と日

本の大学生生活や家庭料理のテーマでは、本やテレビではなかなか知ることのできない、実際の暮らしが垣間見えて、大変面白かった。9回の交流を振り返ってみると「日本語を勉強したい」「日本について学びたい」という2人の真剣な姿が印象に残っている。

6. 4 気づいた変化

ここでは、湖南大学の学生と筆者それぞれの変化について報告する。

まず、湖南大学の学生2名の変化についてであるが、2名とも授業の一環で交流を行っている、という意識が強かったためか、初めの頃の交流ではあまり積極的ではなかった。商さんも何さんも、メールやSNS等の文章でのやり取りでは、日本語のレベルが高く感じられたが、実際に会話をしてみると、誤用が多く、意志の疎通ができないままに諦める場面が多々あった。会話が途切れて無言になることも多く、互いに気まずい場面も多かった。2名ともに、最初の頃は事前に話す文章を考えてきていたようで、テーマから少しずれた話に発展すると、うまく話せない場面があった。

しかし交流を重ねていくうちに、筆者の大学院での生活や、日本の文化などについて積極的に質問をしてきたり、自分の言いたい内容をうまく説明できるまで表現の仕方を変えて話す等の変化があった。最後の方の交流では、会話の流れでテーマからずれた内容になっても、特に困ることもなく、スムーズに会話ができるようになった。

次に、筆者自身が感じた自分自身の変化について報告する。筆者の専門は日本語学であり、日本語教育の知識、経験共にゼロに等しい状態であった。今回の交流には「日本語を教える」というよりは、単に「日本語で海外の日本語学習者と交流を行う」という気持ちでのぞんだ。初めの頃は一度にいくつかの質問をして相手を混乱させたり、誤用があってもなかなか指摘できずに先に進んでしまう、ということがあった。交流を重ねていくうちに、ただ話すだけではなく「相手にとってプラスになる交流にしたい」という気持ちが強くなり、誤用を指摘したり、相手の質問に対して相手が理解できるまで説明を行うなど、自身の気持ちや行動に変化があったと感じている。

6. 5 活動を通じて学んだこと

活動を通じて、分らないことは分らないとお互いに気軽に言えるような環境作りが重要であると感じた。分らないことを素直に伝えることで、相手も私が理解できるように、表現を変えて説明をしてくれるため、相手にとっても良い

トレーニングになるのではないかと感じた。筆者自身も、相手に分かりやすい説明を求められて、どのように言ったら相手に伝わるのか、自分自身の話す日本語を見直すきっかけになったのではないかと感じている。

日本語教育の経験が全くなかった筆者であるが、活動を通じてちょっとした日本語教育の経験を得ることができ、日本語を教える上で大事なこと、注意しなければならないことを学ぶことができたと感じている。

6. 6 おわりに

3か月の交流が終了した後、商さんから1通のメールが届いた。内容は、今度大学内で行われるスピーチコンテストに出場するため、原稿をみてほしい、というものであった。添削というものをしたことがない筆者は、非常に戸惑ったのだが、自分なりに添削をし、返信をした。その返信に対して商さんがお礼のメールをくれたのだが、「小野さんとの交流で自信ができました。これからも頑張ります。」といった内容で、とても嬉しかった。短期間の交流だったが、お互いに試行錯誤を繰り返しながらの交流で、非常に濃い内容だったと感じている。商さんも何さんも、将来は日本語教師になりたいと語っていた。ふたりにとっても今回の交流が良い経験として記憶に残れば幸いである。筆者も今回の活動で得たことを活かし、今後日本語の研究に励みたい。

7. 北見友香の報告

7. 1 はじめに

ここでは、筆者（北見友香）が約3ヶ月間にわたり、中国人日本語学習者とSkypeを使用して交流を行った活動の内容とその中で生じた問題点、気づいた変化について報告する。

7. 2 実践の概要

平成24年5月10日から7月8日にかけて、彭偉さんと交流を行った。交流活動は毎週木曜日に1時間程度行い、3ヶ月で計7回交流を行った。初回は自己紹介を行い、2回目以降は学校で課されたテーマに沿って互いに自国の文化について紹介し合った。

7. 3 印象に残ったこと

学習者との交流活動を通して、普段は無意識に接している日本語や日本の状

況を客観的に捉え、学習者に伝えるということがいかに難しいかを考えさせられた。例えば、初回の交流活動で自己紹介をしている時に、「北見さんは“がんばりか”ですね。」と学習者に言われ、誤用だとは気付くものの教え方が分からず最初は困惑した。会話を重ねるうちに「勉強家」と「頑張り屋」を混同していると気づき、正しい意味と用法を指導するに至ったのだが、なぜ学習者が混同してしまうのかを考えるきっかけになった。また、2回目の交流活動で「英語教育」の話題になった時には、日本の状況を伝えることの難しさを実感した。中国では英語教育はそこまで必要あるのかという議論が盛んに行われているのに対し、日本では小学校から英語教育が義務付けられ、英語教育推進の傾向があるということなど日本の状況や日本文化についても普段から意識し説明出来るようにしておくべきなのだと感じた。

7. 4 気づいた変化

Skype による交流活動の中で、学習者の日本語能力に喜ばしい変化が見られた。学習者の彭偉さんは、初めのうちはこちらから質問したことに対して答える、もしくはテーマに沿った内容のみを単文で説明していた。しかし、3～4回目からは互いに信頼関係が生まれてきたことによって、リラックスした雰囲気会で会話をしていると、自分から話題を振ってきたり、日本語や日本の文化についてたくさん質問をしてきてくれて、学習者の発話量が回を重ねる毎に増えていった。発話量が増えることで、後半の交流活動では使用する語彙の種類が豊富になり、説明をする時も接続詞などを用いて複文で流暢に話せるようになっていた。

7. 5 活動を通じて学んだこと

日本語教師というと、正しい日本語を教えるというイメージが強かったが、一方的に日本語を教えるのではなく、学習者のレベル・目標・興味によって内容を変えたり工夫したりすることが大切だということが分かった。まずは学習者とのコミュニケーションを大切に、学習者が発話しやすい雰囲気作りや信頼関係を築くことから始め、互いに「伝えたい」「分かり合いたい」という気持ちを持つことが言語を習得する際にとても重要になるのだと気づいた。また、学習者のモチベーションを高める方法として、教師側の意識を「教える」というものではなく「教えてもらう」という意識に変えることで、学習者の発話量を増やすことが出来た。学習者が日本語について質問してきた際に教師が答えられないというのは信頼関係を失う恐れがあるが、学習者の母国に対して何も

知らないという立場で学習者に質問をすると、学習者は自分の母国について伝えようと一生懸命日本語を用いて説明してくれるため、日本語の運用能力の向上に繋がるのではないかと感じた。学習者の日本語能力が高かったこともあり、質問をされた時にすぐ答えを教えるのではなく、一緒に例文を作って答えを導いていくという教え方に変えたことも、学習者に合っていて良かったと思う。学習者の誤用をどのタイミングで、どのくらい指摘すれば良いのかということに関してはとても難しく、初めのうちは戸惑ってしまい見逃すことが多かったが、3～4回目からは注意のタイミングを工夫して、学習者が説明している時は間違いをノートに書き留めておいて、後で説明をするようにした。また、学習者の誤用を直してその場ですぐリピートしたり、「それは～ということですか」という確認を含めた相槌を打ったりして、話の腰を折らないように訂正をすることで、学習者の会話意欲を損なうことなく、解決できたと思う。

7. 6 おわりに

ボランティアで日本語を教えたことしかない筆者にとって、Skypeを用いた日本語教育という今回のプロジェクトはとても貴重な経験となった。こちらが日本語を教える立場だったが、日本と中国の文化の違いや学習者から見た日本語など、学習者から学ぶことが数多くあり、充実した時間を過ごすことが出来た。また、日本語教師という立場からは、言語を教える難しさや学習者とのコミュニケーション関係について考える良い機会となった。

また、今回の Skype 交流活動を通じて以下のような問題点が出てきた。1つ目は、文法などに重点を置く授業の場合は、学習者の誤用をどのタイミングで、どのくらい指摘すれば学習者の会話意欲を損なうことなく正しい日本語を教えられるのか。2つ目は、会話の主導権が学習者に渡って、教師が会話をコントロール出来なくなってしまった時にどう修正していくか、ということだ。学習者の発話を増やそうとすると話の内容がテーマから外れてしまうことが多くなり、修正するのがとても困難になってしまった。出来る限り自然な形で修正するように工夫したが、学習者が楽しそうに話をしている時に話題を修正するというのは信頼関係が深まるほどやりにくかった。教師と学習者は友達同士ではない、という適度な距離感を保つ難しさを感じた。この問題に関しても、日本語教育を学んでいく上で今後の課題としていきたいと思う。

今回の Skype 交流活動によって、学習者から多くのことを学び、日本語教育について考える良い機会となった。そして約3ヶ月という短い期間の中で学習者の日本語能力が高まっていく過程を見ることが出来て、とても嬉しく思う。

今回の交流活動が学習者にとって日本や日本語に親しみを持ってもらえる1つのきっかけになっていたら幸いである。日本語の知識や教える技術も大切だが、学習者に合った教え方や学習者との関係性などの重要性は実際に教えてみないと分からない部分であるため、とても有益な経験になった。この経験を今後の日本語教育の研究に活かしていきたい。

8. 竹原英里の報告

8. 1 はじめに

ここでは、筆者（竹原英里）が約2ヶ月間にわたり、中国の日本語学習者とSkypeを活用して行った会話交流の活動内容と、気づいたことや活動を通じて学んだことについて報告する。

8. 2 実践の概要

筆者は平成24年5月16日から7月16日にかけて、中国の大学生、李葉亭さんと交流を行った。交流時間は1時間程度、交流回数は2ヶ月の間で全8回行った。活動日時については、Skypeのチャット機能やE-mailを利用し、調整があった。また、インターネットの環境が悪く、一回の交流で何度もSkypeが切れてしまった時もあったが、その際は日時を変えて行ったりもした。第一回は自己紹介を行い、二回目以降はテーマを決め、そのテーマに沿って会話中心の交流活動を行った。

8. 3 印象に残ったこと

日本語学習者の李葉亭さんは、日本語学科に通う学生であったため、日本語で意思疎通することに全く支障がなかった。また日本についても、映画・ドラマ・漫画・小説など、多くの日本文化についての知識を持っていた。

2ヶ月間の交流の中で特に印象に残っているのは、日本語の敬語について質問をされた時である。李葉亭さんは、敬語の使い方の中でも、「もらう」「くれる」「あげる」の尊敬語が難しいということで、例文を出しながら教えた。その際、先生と友達と3人で話している時に、敬語と普通形を使い分けるのが難しいとも言っていた。また、中国語も日本語と同じように敬語を使うことを教えてくれた。中国語は、友達や夫婦などがケンカした時に敬語を使うことがあるらしく、日本でもケンカした時などに、わざと嫌みとしての敬語や丁寧語を使うことがあるので、とても似ていて面白いと思った。

また、テレビや映画の話をした際、「おすすめの映画を教えてください」と言われ、いくつか日本の映画を推薦してあげたところ、次の週までに推薦した映画を見てきてくれて、どの部分が面白かったかなどを意見してくれたことにはとても驚いた。日本語を勉強するだけではなく、日本の文化などに親しみをもち、勉強していこうとする気持ちが、教える側としてとてもうれしかった。

8. 4 気づいた変化

李葉亭さんは活動当初、毎回テーマが決まっていたためか、自分が話す内容を文字にして、それを読みながら話していた。そのため、筆者が質問などをしたり、説明を求めると、話の内容がぐちゃぐちゃになってしまったり、だまってしまうことがあった。説明をしようとする単語だけを並べて話してしまったりするため、筆者が「～ってことですよね？」と聞いたり、「もう一度説明してもらってもいいですか？」などと繰り返し聞いて説明してもらったりした。交流が進むにつれ、読みながら話すということはなくなり、説明の仕方も活動当初に比べてとてもよくなったと思う。また、分からない単語があると、すぐ中国語で紙に書いて見せてきたりしていた。漢字で書いてあるので、どんなことを言いたいのかは伝わったが、毎回日本語で説明をするようにさせた。その成果なのか、交流の最後の頃には漢字を書いて見せることもなくなった。学習者が、日本語を使い、一生懸命説明しようとする姿は、この交流において大きな変化であったと思う。

また、李葉亭さんは活動当初は、発話する回数が少なく消極的だったが、回を重ねることで発話回数が増え、筆者に質問をしたり、大学の日本語の授業でわからなかったことを聞くなどするようになった。交流のテーマが「自分の故郷」であった時は、自分の故郷の有名な観光地や、自宅の写真などを E-mail で送ってくれたりもして、回を重ねるごとに交流活動に対して積極的になったと思う。

8. 5 活動を通じて学んだこと

今回、Skype を使った交流活動を通して多くのことを学んだ。特に、相手が話しやすい環境をつくるのがとても重要であると思った。また、学習者がわからない言葉を、教える側がどのようにわかりやすく説明するかということが日本語を教えるにあたって必要な能力であり、この交流を通して筆者自身も学び、成長することが出来たのではないかと思う。筆者が日本語を教える側であったが、学習者から教えられることもたくさんあった。中国と日本の文化の

違いや、また、学習者からの質問によって、筆者が日本語や日本の文化について学ばせられることも多くあった。2ヶ月という短い交流ではあったが、日本語を教えることの難しさや楽しさ、面白さについて考え学ぶ大きな機会になったと思う。

8. 6 おわりに

ここでは、筆者が中国の日本語学習者と Skype を利用し、交流を行った過程と結果を報告した。筆者は Skype を使用した交流活動を行ったのは初めてだったが、この活動を通して日本語という言語を教えることの難しさや面白さを感じることができた。また、筆者が日本語を教える側ではあったが、中国の文化や風習、流行のものなど、多くのことを知ることができて、2ヶ月だけではあったがとても充実した楽しい交流ができたと思う。また、交流相手がこれからも日本語や日本の文化に興味を持ち、楽しく勉強を続けていってほしいと思う。終わりに、このような交流の機会を設けてくれたことに感謝したい。

9. まとめと今後の課題

2012 年度に実践女子大学と湖南大学間で行った Skype を用いた交流活動について、実践内容とその評価を報告した。参加した実践女子大学の学生の報告からは様々な「気づき」「成長」があったことが読み取れ、参加者自身による活動に対する評価も好評であった。今回は湖南大学の学生については調査を行うことができなかったが、活動期間の延長を湖南大学の学生が要求したことから、彼らがいかにこの活動を楽しみにしていたかが伺えるであろう。

繰り返しになるが、コーディネーターの立場から見て、活動報告の場を Facebook に移したことによるメリットは大きかった。また、アンケートの分析からは、Facebook を内省の場として活用しており、他のペアの様子を知ることが副次的であったことがわかる。しかしながら、今回は筆者が全ての書き込みに対してレスポンスを行った。対照実験をしていないので断言はできないが、もし書き込みに対して何の反応もなければ、これほど積極的な書き込みが最後まで継続していたかはわからない。そのレスポンスの作業という観点からは、画面の切り替えなしに素早くレスポンスできる Facebook のインターフェースは非常に便利であったと言える。本実践からは活動後のダイアリ活動の重要性、また、Facebook の持つアドバンテージが明らかになったと言える。

また、5. ～ 8. に掲載した大学院生の報告からも、日本語教師という仕事のやりがいへの気づきや、教師が学習者に教えるという一方的な関係だけでは

ないことへの気づきが見られたことがわかる。これは過去の報告（中俣・岸・片岡 2011、中俣・中西・由井 2011）にも見られた内容であり、Skype を用いて海外の学習者に日本語を教える活動の大きな効果であると言える。

今後の課題としては、まず録音したデータをコーパス化することである。様々な話題についての 42 時間に及ぶ Skype を用いた会話のコーパスは、完成すれば規模・真正性といった面で過去に例を見ないものになるであろう。できるだけ早く文字化の方針を固めるとともに、科研費を獲得し、一気に完成を目指したい。

また、今後は日本語教育とは必ずしも関係のない日本人学生と、海外で日本語を学ぶ学生の交流も進めていきたい。今回の活動を通して異文化に対する気づきが多く見られた。海外にルーツを持つ児童・生徒が増えている今、異文化の受容という経験は、特に教員を目指す学生にとっては必要不可欠ではないか。ただし、日本語教育の授業をとっている学生を対象にした方法がそのまま適用できるとは限らない。今後の課題である。

参考文献

- 大谷つかさ・中俣尚己（2012）「Skype を活用した会話活動―「教えこむ」立場からの脱却―」『日本語教育世界大会 2012 発表予稿集』
<http://www12.ocn.ne.jp/~nakamata/ICJLE2012.jpg>
- 曾余田浩史・岡東壽隆（2002）『ティーチング・プロフェッション 21 世紀に通用する教師を目指して』明治図書
- 張賛（2012）「敬語コミュニケーション学習における「変容」に関する考察：上級学習者の事例分析から」『待遇コミュニケーション研究』9, 待遇コミュニケーション学会
- 中俣尚己・岸磨貴子・片岡由紀雄（2011）「日本語教員養成における自己効力を高めるための遠隔会話演習の実践」『日本教育工学会 2011 年全国大会発表論文集』
- 中俣尚己・中西久実子・由井紀久子（2011）「日本語教員養成における Web ダイアリの可能性―国内での実践と海外での実践―」『無差』18, 京都外国語大学日本語学科
- 中俣尚己・岩崎瑠莉恵・荻原知世・中野仁美・山上聡美（2012）「Skype を活用した初級日本語教育プログラム」『実践国文学』82, 実践国文学会

謝辞

交流の申し出を快く受けてくださった湖南大学日本語学科長の張佩霞先生と、実践にあたってお世話になった楊昉先生に、厚く感謝を申し上げます。また、実践女子大学での実践を許可くださった日本語学科の先生方、特に山内先生に感謝申し上げます。

本研究は実践女子学園社会情報教育イノベーション研究所ならびに科学研究費補助若手研究（B）「中国語話者のための日本語教育文法を構築するための基礎研究」（課題番号 24720239 研究代表者：中俣尚己）の助成を受けました。

最後に、本実践に参加した実践女子大学と湖南大学の皆さんに御礼申し上げて、実践報告の結びとさせていただきます。

なかまた・なおき 京都教育大学 講師
うるしだ・あや 実践女子大学大学院博士前期課程
おの・まいこ 実践女子大学大学院博士前期課程
きたみ・ゆか 実践女子大学大学院博士前期課程
たけはら・えり 実践女子大学大学院博士前期課程